

YAHOO JAPAN ニュース

「助けは来ない。だから自分たちでやる」軍事政権に挑むミャンマーの若者たちの希望と苦悩を聞け①

9月18日（金）

舟越美夏（ジャーナリスト、アジア政経社会フォーラム（APES）共同代表）

元共同通信社記者。2000年代にプノンペン、ハノイ、マニラの各支局長を歴任し、その期間に西はアフガニスタン、東は米領グアムまでの各地で戦争、災害、枯葉剤問題、性的マイノリティーなどを取材。東京本社に帰任後、ロシア、アフリカ、欧米にも取材範囲を広げ、チェルノブイリ、エボラ出血熱、女性問題なども取材した。著書「人はなぜ人を殺したのか ポル・ポト派語る」（毎日新聞社）、過酷な日々を生き抜いた人々の愛と死を描いた「愛を知ったのは処刑に駆り立てられる日々の後だった」（河出書房新社）、トルコ南東部のクルド人虐殺「その虐殺は皆で見なかったことにした」（同）。龍谷大学犯罪学研究センター嘱託研究員。



死亡した民主派、国民防衛隊（PDF）の若者の葬儀＝ミャンマー東部（現地から入手）

椰子の木が真っ二つに折れ、高床式住居は廃屋のようだ。床板の黒い染みは、死亡した家主の血の痕だという。数十メートル離れた空き地には、爆撃で陥没した穴。不発弾も埋まったままだ。

ミャンマー東部のタイとの国境近く。少数民族武装勢力、カレン民族同盟（KNU）支配地域であるこの一帯に、ミャンマー国軍は、6月から激しい空爆を続けている。夜間に爆撃されたこの村では3人が死亡し、一帯では、学校や病院なども被害を受けている。

ミャンマーで国軍がクーデターを起こしてから1年半が過ぎ、軍事政権の行動は、なりふり構わぬ様相を帯びている。抵抗勢力が活発な地域で空爆や放火、虐殺をエスカレートさせ、国際社会の中止要請にもかかわらず7月末、民主活動家4人の死刑を執行。その数日後に日本人ジャーナリストを逮捕・起訴し、9月には元英国大使夫妻が禁錮1年の刑を言い渡された。

背景にあるのは、抵抗勢力を抑え込めない焦りと、「国際社会は非難や憂慮を表明する以上の行動には出ない」という判断だろう。もっともその判断は、軍事政権に抵抗する市民、中でも武器を取った若者らの思いと一致している。実際、ウクライナ報道と異なり、ミャンマーでの激しい空爆を外国メディアはほとんど伝えない。



夜間に空爆を受けた村。3人が死亡し多数が負傷したという＝ミャンマー東部(筆者撮影)

「助けを待っていても仕方がない」「自分たちで軍事独裁政権を終わらせる」。ミャンマーとタイとの国境近辺のカレン民族同盟(KNU)支配地域で会った若者たちは、揺るぎない口調でそう語った。彼らはクーデターが起きるまでは、政治活動には無縁の10代、20代だった。学生、医師、海産物養殖業者、鉄道員、主婦…。ジャングルや軍尋問センタ

ーでの過酷な日々をくり返して、国軍に挑み続けている。

なぜ武器を取り、どんな思いを抱き、いかなる問題に向き合っているのか。また凄惨な虐殺を続ける国軍とはどんな組織なのか一戦闘中や訓練中の動画や写真をスマホに保存している大胆さに世代の差を感じつつ、若者のほか、命懸けで離脱した国軍兵士らの話にも耳を傾けた。彼らの声をシリーズでお伝えする。

カレン民族同盟(KNU)は、ミャンマーで最大規模の少数民族武装勢力。カレン人の自治権拡大を目指し、1947年に結成された。2012年に当時の軍事政権と停戦合意したが、昨年2月のクーデターではいち早く国軍を非難。命を狙われた民主活動家や市民、離脱した国軍兵士や警察官を匿った。また、軍事訓練を希望する若者らを各地から受け入れ、関係者によると、その数は6万人以上。KNUのソートーニ報道官は、軍事政権に対抗して創設された民主派「挙国一致政府」(NUG)とは、紆余曲折を経ながらも「緊密な協力関係にある」と語る。軍事訓練を受けた若者のうち数万人がNUG傘下の「国民防衛隊」(PDF)に入隊した。うち多数がKNU主導の編成部隊に所属し、国軍に挑む。KNU以外の少数民族武装勢力から軍事訓練を受けた若者もいる。訓練を受けた若者たちが故郷に戻って結成したPDFグループは全土で500を超えており、指揮系統の構築がNUGの大きな課題だ。

■銃を取った26歳の医師

ネイトウレインは26歳の医師である。最大都市ヤンゴン郊外の村で生まれ、6人きょうだいの長男として育った。「母の希望で医師になった」と言うが、性来の負けず嫌いとかんの良さ、責任感が言葉の端々から窺えた。情熱と無謀さ、繊細さも持ち合わせ、仲間から愛されるタイプである。自分を捨てて国軍兵士と結婚したガールフレンドの写真をいまだにスマホから削除していないこと、クーデターが起きるまで政治には興味がなかったこと、安月給で長時間労働の医師の仕事があまり好きではなかったこと。率直なのか、自虐的なのか、時には判断がつかない彼の語り口に、私は幾度も笑った。だが後から考えれば、医師としてではなく20代の若者として向き合う夥しい死の現実について、彼は明確に言葉にしてくれなかったと思う。「軍の暴力を止めるのは自分たち世代の責任」と感じ、武装闘争を決意した若者の胸の内は、単純な言葉では表せないだろう。

2021年2月1日午前4時ごろ。ヤンゴンの国立病院の産婦人科で当直をしていたネイトウレインは、上司に携帯電話をかけようとしていた。急患で運ばれた妊婦に帝王切開が必要で、上司に知

らせる必要があったのだ。だが携帯電話の電波が消えている。何かあったのかもしれないと思いながら、病院内の上司の部屋まで走った。

手術が無事に終了し、帰宅しようと自分の車に乗ったのは午前9時ごろだった。「国軍が全権を掌握した」。ラジオをつけると、そんな情報が流れた。どういうことなのか。疲れ切っていて深く考える余裕がなかった。休息を取った後、生まれ育った村を巡回する国軍兵士の姿を思い出した。銃を携えた威張り腐った態度。あんな奴らの下で生きていくのか。すべてが終わったような気がした。

病院には 1988 年の民主化要求運動に参加した年配の医師がいた。僕たちは何ができるのでしょうか。そう聞いてみた。

「経験から言おう。平和デモで抗議してもどうにもならない」

1988 年の運動は、武力弾圧で数千人の大学生や僧侶らが殺害され終わった。多数が殺されたという恐ろしい噂が村に伝わったと、母から聞いたことがあった。

「国軍に勝つためには、武力闘争しかない。やるかどうかは、君たちの世代が決めることだ」

「武装勢力とのコネクションはありますか？」「残念ながら、ない」

上司の答えにもネイトウレインは落胆はしなかった。興味を引かれて聞いただけで、武力闘争を考えた訳ではなかったからだ。軍事政権が「民政移管」を始めた 2011 年、彼はまだ 15 歳。民主化が進み外国企業が次々と入り、社会がスピードをつけて変化していく中で大学時代を過ごし、政治に興味を抱く機会なんてなかった。

■僕らがやっていることはクレージーじゃない

「抗議デモをしよう」。クーデターから 2 日が過ぎた 2 月 3 日、友達 2 人が声を掛けてきた。無下に断れず、ついて行った。とは言うものの、デモは初めてで、どうやったらいいのかわからない。勤務先の病院に近い、ヤンゴン郊外の地区の中学校前に行った。向かいに市場があり、多くの市民の目に留まるんじゃないかと思ったからだ。「われわれは民主主義を求めると書いた白い紙を持ち、3 人で立った。異星人でも見るような目を投げかけ、人々が通り過ぎた。

この日は 2 時間ほどで帰ったが、翌日は 6 人で同じ場所に立った。今度は、次々と人が集まってきた。30 代以上の「シニア」ばかりで同世代はいなかったが、すぐに 200 人ほどになった。それから、日を追うごとに参加者は増大した。スローガンを書いた紙は、横断幕に変わった。「お前、何やってんだ」と言っていた病院の同僚たちもやって来た。2 月 11 日には、2 千人近くにまで膨れ上がった。

「僕たちがやっていることはクレージーじゃない、正しいんだ」。集まった人々を見て、抗議デモには大きな意義がある、とネイトウレインは確信した。



演説するネイトウレイン（本人提供）

教師の男性が提案した。

「君はみんなの前でスピーチをするべきだ。医師は尊敬されている。皆が耳を傾けるはずだ」

ヤンゴンでは、国立病院の医療従事者たちが抵抗を意味する 3 本指サインを掲げ、

職場をボイコットする「市民不服従運動」(CDM)を発表して、大きな反響を呼んでいた。

「演説なんかやったことありません」

躊躇したが、「原稿を書いてやるから」と説得された。

渡された原稿を何回も練習して暗記し、数日後に数千人を前に壇上に立った。頭の中が真っ白になった。どう始めたのかよく覚えていない。

「1988年の民主化運動は勝てなかった。その子どもであるわれわれは、さらに抑圧にさらされている」そう叫ぶと、聴衆から一斉に拍手が沸いた。「今、戦わなければならない」

熱気に鼓舞されて思わず拳を振り上げた。人々はこんな言葉を欲しているんだと思った。

それからは毎日、演説をした。教育システムや医療体制の遅れを指摘した言葉も自分で付け加えて、5回目をやったところで演説がすっかり好きになっていた。



抗議デモで先頭を歩くネイトウレイン（本人からの提供写真）

年記者たちは過去の経験に基づいて若者達にアドバイスをした。「同じ所に立っているだけじゃ聴衆が飽きてしまう」というのもその一つ。ネイトウレインは先頭に立って、シュプレヒコールを上げながらデモ行進した。

「われわれは民主主義を求める」「われわれの大統領を釈放せよ」

声が枯れると、LGBTの友人にマイクを渡した。甲高くよく通る友人の声は遠くまで響き、評判になったんだ。警察は遠くから見ているだけで、どうしたらいいのか、分からないようだった。

2月22日、民主派のネットメディアなどが呼び掛け、全国で一斉に民主化要求デモが行われた。参加者は全国で数百万に上ったといわれる。ネイトウレインたちが率いたデモは、参加者の列が何キロにも伸びた。

われわれは勝利する。誰もがそう思っていた。

■武力弾圧始まる

デモの光景は軍事政権トップの予測を上回り、恐怖となったに違いない。警察がゴム弾と催涙弾を使い始め、3月には警察の後ろに控えていた国軍が、銃を市民に向けた。

3月8日、午前。イーストヤンゴン大学前に軍車両が3台、警察車両が3台、バリケードをつくった。若者たちが抗議運動に集まるに連れ、さらに到着した4台の軍車両が催涙弾を構内に向け撃ち込んだ。

デモ隊の中にいたネイトウレインが、立ち上る煙の中で口と鼻を押さえ周囲を見渡すと、仲間はずでに逃走したのか姿がない。警察官が近づいて来た警察官と激しい揉み合いとなり、着ていたシャツのボタンが飛んだ。警察官を押し倒して走り出した。近くの民家の間を逃げ回り、目につい

た用水路に飛び込んだ。底に溜まっていた水で、焼けるように痛かった目を洗い、そのまま軍や警察がいなくなる夜まで身を潜めていた。

「つかまったかと思ったよ」

連絡した友人たちはほっとしていた。軍と警察は運動のリーダーらを探し回っている。そんな情報が回ってきたが、抗議運動をやめるつもりはなかった。寝場所を変えたりしながら、仲間たちと4人でギターを弾いて民主化を求める歌も歌った。

「見せしめ」のように国軍がデモ参加者を射殺する事件がヤンゴンや中部マンダレーで起きていた。だが国軍の狙いと反対に、事件は若者たちをさらに抵抗へと駆り立て、一部の若者たちがスリングショットや花火、火炎瓶で対抗した。

3月下旬、ヤンゴン近郊のタンリン。ネイトウレインが初めて国軍の発砲を経験したデモだった。実弾を使うとは想像していなかったが、近くに病院があったのは幸運だった。大混乱の中、ネイトウレインは左脇に被弾した男性の傷口をシャツで縛り、足首を撃たれた男性が抵抗を示す3本指サインを掲げてストレッチャーに載せられるのを見送った。弾丸が腹部をかすめた男性は、大量に出血していた。

「痛みに耐えられるか」

男性が「大丈夫だ」と答えるのを確認してから、横断幕作成用に持っていた大型ホッチキスで傷口の20箇所を留めた。

■暴力を止めるためには

ネイトウレインは政治にも武装闘争にも、元々は興味がなかったのだ。だけど、国軍や警察が市民に実弾を浴びせ、兵士たちが医師の手術衣を踏みつけているのを見て、気持ちが変わった。平和デモが武力で弾圧されても、国際社会からは助けが来ないのだ。

「国軍の暴力を止めるには、武器で対抗するしかない。僕たちに何ができるかを見せなければ」。そう思うようになった。「平和デモでは勝てない」という上司の言葉は頭から消えなかったのかもしれない。

匿ってくれた僧院は、僧院の名前が書かれた車を使わせてくれた。国軍の目を掻い潜りながら活動が続ける中で、国民民主連盟(NLD)のピョーゼヤート一元議員(7月下旬に死刑執行)と知り合った。彼の下で10日間を過ごし、エアガンの撃ち方や、大きな爆発音を立てる音響爆弾の作り方も習った。音響爆弾は殺傷能力はないが、大きな爆発音を立てて「我々は戦う」とアピールすることが狙いだった。時計を付けた時限爆弾なのだが、うまく作動しない。何度かトライし、ある時、爆弾を設置した後、近くに監視カメラが仕掛けてあることに気づいた。もう遅い。録画されているはずだ。逃げるしかなかった。

「こっちに来るか？ 医者の方には軍事訓練は厳しいが」

カレン民族同盟(KNU)の友人が言ってくれた。躊躇している時間はそれほどなかった。車を運転してタイ国境近くの町レイケイコーに着くと、KNUの友人が迎えに来てくれていた。

「これからどうしたいか？ KNUに参加してもいいし、市民不服従運動(CDM)の活動家として避難民キャンプで生活してもいい。われわれには医療の知識がある者が足りないから、医療活動をしてくれるとありがたい」。

KNU 司令官に聞かれ、ネイトウレインはキツパリと答えた。

「武器を取って戦いたい。軍事訓練を受けたら、ヤンゴンに戻って都市ゲリラ活動をしたいんだ」



匍匐前進の訓練をするネイトウレインら（本人提供）

そうは言ったものの、KNU 支配地域には、マラリアで苦しんでいる兵士や住民が多数いて、医療従事者が必要だった。ネイトウレインは治療薬や医療道具を担ぎ、雨のジャングルの泥道を7時間も歩いて到着した村で、患者をみた。村人を集めて医療や応急手当の基礎を教えた。

KNU で衛生兵を育てるコースの講師も開いた。その合間に軍事訓練も受け、7、8キロのザックを背負って丘を駆け登り、マラリア治療が必要な村まで走った。

■彼女が国軍兵士と

そんなある日、友人の言葉に打ちのめされた。

「あの子、国軍兵士と結婚したってよ」

6年前から付き合っていた看護師のガールフレンドのことだった。彼女にせがまれ、右胸に名前まで彫っていた。婚約指輪を贈った日は、たまたまクーデターの日と重なってしまったけれど、デモの日々を彼女は共に歩いた。KNU 支配地域に来てからも連絡を取り合い、喧嘩をしたり仲直りをしたりしていた。

「結婚したい相手ができたら知らせてくれよな」

そう言ったこともあったけれど、自分達はいつか一緒になるのだろうと思っていた。数日前、彼女と連絡がつかなくなった時は、少し不安になった。

他の男ならまだしも、どうして国軍兵士と？ いくら考えても分からない。カレン人の強い酒を毎日飲みまくった。

「お前、そんなことやってたら死ぬぞ」と周囲から諷められた。32歳の歌手ネイローンが「いいことを教えてやる」とギターの弾き方と歌の作り方を教えてくれた。

これが救いになった。2人は共に、数多くの歌を作った。「この痛みから/僕を救い出して」



ネイトウレインの歌は仲間たちの間で人気になった（本人提供）

ネイトウレインがギターを弾きながら歌い、サビを仲間たちと合唱する動画がある。傷心の歌は特に人気だったようだ。愛する人と離れてジャングルで戦う10代、20代の若者たちは、彼の歌に自らを投影していたのだろう。

右胸の彼女の名前の上に、新たなタトゥーを彫ったが、スマホにある彼女の写真は削除していない。

「もう痛みには慣れました」。写真を見せてくれるよう頼むと、少し照れてそう言い、探し出してくれた。薔薇色のロンジー(民族衣装)に白いトップスの、愛らしい女性がスクリーンの中で微笑んでいた。

■家族のような仲間たちの死

2021年12月、ネイトウレインは初めて戦闘に出た。絶大な信頼を持つカレン民族同盟(KNU)司令官をトップに据え、国民防衛隊(PDF)とKNU兵士で編成する「コブラ縦隊」の一員にもなった。半年ほどの間に参加した戦闘は5回に上る。マラリアに7回感染し、1度は意識不明に陥りタイ側の病院に入院した。そんな時でさえ、仲間が所属する大隊が苦戦を強いられていると聞いて病院を抜け出し、戦闘に参加した。KNUのスナイパーに教えられ、狙撃銃で約800メートル先の国軍兵士を撃った。

国軍から追われていたネイトウレインは、家族に危険が及ばないように、公には「死亡した」ことにしている。家族は生存を知っているが、盗聴やインターネットチェックを警戒して、連絡を絶っている。そんな彼の家族は今、ジャングルで共に戦う仲間たちなのだ。親しい仲間が戦闘で死亡してから、死は怖くなくなった。死ぬかもしれない、という不安より、「戦いたい」という意志が勝るようになったという。

別れの日突然に来ることは、それぞれが覚悟しているだろう。それでも、家族同然の仲間たちとの別れは辛い。そのうちの1人がある日、「僕のために歌を作ってくれないか」と言った。

「いいよ」。ネイトウレインは気軽に承諾した。

一週間後、その仲間はジャングルで死んだ。遺体を入れた木箱に国民防衛隊(PDF)旗を置き、荼毘に付す葬儀が行われた。

「彼は自分の死が近いと予感していたと思う」。ネイトウレインが約束を守り作った歌には、独裁政権を倒すためには「他に方法がない」と武器を取った若者たちの、胸の底にある切ない思いがあった。

さようなら、母さん

さようなら、愛しい人

さようなら、美しい山々

さようなら、仲間たち

僕は全力を尽くした

愛する国のために

愛する人たちのために

この体を捧げた

でもさよならを告げるのは、なんて辛いんだろう

(了)

【武器を取ったミャンマーの若者たち②】拷問の日々を彼女が耐えた理由「若い世代が戦わなければ未来失う」

9月26日(月)



カレン民族同盟に参加し、結婚したモーサットエインと JK (本人からの提供写真)

27日に行われる安倍晋三氏の国葬に、日本政府が「招待」したミャンマー軍事政権は、抵抗勢力が活発な地域で空爆や放火、虐殺など激しい弾圧を続けている。今月19日には、北西部ザガイン地域で国軍が学校を空爆し子ども11人が死亡、15人が行方不明となった。

「招待」が軍政承認につながるのではと、ミャンマー市民や国際社会から懸念や怒りの声が上がったのも無理はない。

モーサットエインは、22歳。ザガイン地域近くに位置する古都、マンダレーの出身だ。少数民族武装勢力であるカレン民族同盟(KNU)と民主派「拳国一致政府」(NUG)傘下の国民防衛隊(PDF)で編成する「コブラ縦隊」で、地雷や爆発物を仕掛ける班に所属している。

マンダレーは、民主活動家のテーザーサン医師がいち早く抗議の声を上げ、「国軍が未来を奪った」と憤っていた若者たちを行動へと導いたことでも知られる。彼女もそんな若者たちの一人で、当時は大学生だった。

モーサットエインは終始、淡々と話したが、軍尋問センターで拘束された日々を経験は、通訳をしてくれていた医師が「ちょっと僕には訳せない」と時折、中断するほど過酷だった。彼女は、1年半前までは普通の学生だったのだ。拷問を生き抜き、残酷な記憶を抱えたままなお、国軍に対峙しようとする彼女に私は驚嘆し、耳を傾け続けた。

モーサットエインの隣では3歳年上の男性 JK が、静かに耳を傾けていた。2人は今年6月にジャングルで結婚したばかりで、コブラ縦隊では同じ班に属し、心身共に支え合っていることがうかがえた。



結婚当日のモーサットエインと JK (本人からの提供写真)

「自分たちがやらなければ、誰がやるのか。助けをただ待っているわけにはいかないんです」。JKは、若者たちを匿った僧侶や妊婦を、兵士が容赦なく殺害するのを目の当たりにし、武装闘争を決意した。

「革命を達成できたら、2人で普通の生活をしたい」。モーサットエインはつぶやくように言った。

(連載第1回)

■「戦わなければ未来を失う」

未来と、将来の夢を返して。国軍がクーデターを起こした時、そんな思いでした。

私は幼い頃に父を亡くしましたが、精米業を営む母の下で、兄と共に不自由なく育ちました。これからどうしたらいいだろうか。家族で話しました。母は、タンシュエ(1992年から2011年まで軍事政権のトップだった独裁者)と国軍が大嫌いでした。

「しばらく静かにしていたら、全てが元通りになる」という噂が流れ、私たちは期待と疑いを持って成り行きを見守っていました。しかし2021年2月4日、民主派指導者のテーザーサン医師が、大学前で抗議の声を上げたのです。「若い世代が戦わなければ、未来の全てを失ってしまう」。医師の言葉に、私たちは触発されました。治安当局に一時、拘束された医師が6日に釈放されると、私と友人を含む約30人が彼のもとに集まり、抗議活動を始めたのです。



テーザーサン医師=2021年2月4日、マンダレー(写真:ロイター/アフロ)

マンダレーではその後、大学や職種ごとにさまざまな抗議グループができ、テーザーサン医師は運動のやり方を指導するために走り回るようになりました。当初は医師についていただけだった私たちのグループも、デモを自分たちでやっていくことになったのです。

全国で抗議デモが行われた2月22日、マンダレーでは百万人が声を上げました。しかし

私たちは、国軍や警察はやがて弾圧を始めるだろうと、覚悟もしていたのです。

予想通りに国軍と警察はゴム弾と催涙ガスを使い始めました。いざという時に逃げるため、自宅の台所で砂糖やベーキングパウダーを使って発煙弾を作り、着火用のライター、それにガスマスクやフェイスシールドも準備して連日、デモに出かけました。上の世代は、そんな私たちに休む場所や食事を提供してくれていました。

■軍専門センターに連行

3月3日午前のことです。私たちは街中の交差点付近に数千人が集まりました。「解散しろ!」。バリケードの向こう側から怒鳴り声が聞こえ、ゴム弾と催涙ガスが放たれました。そこで、私のグループを含む百人ほどを残し、あとは一旦、退却したのです。

銃声が響き、バリケード近くにいた19歳のチェーシンが倒れました。彼女とは7年生からの友人でしたが、違う大学に通っていたのでグループは別でした。彼女のグループはメンバーが23人で、チェーシンは唯一の女子。目立っていたから狙われたに違いありません。今の私には分かるのですが、響いたのは狙撃銃の発砲音ではありませんでした。



射殺される直前のチェーシン(左から2番目)=マンダレー、2021年3月3日(写真:ロイター/アフロ)

思わず、彼女に走り寄ろうとしました。その時、2台の兵員輸送トラックが私たちを挟み討ちする

ように突進して来たのです。車は女子2人をはね飛ばして止まり、兵士たちが走り出て、逃げる者や倒れた者を次々と捕まえました。私は弾みで近くの家を表玄関の鉄格子に体ごとぶち当たって地面に倒れ、6人の兵士に囲まれてしまったのです。

乗せられた兵員輸送トラックの床に、私と同じグループで女友達のプー、男友達のニッキ(共にニッキネーム)、ほかに4人が座らせられました。4人は、一般刑務所のオーポーで降ろされましたが、私たち3人は「軍尋問センター行きだ」と言い渡されました。私はバッグに30個の発煙弾とライターを持っていて、プーもニッキも同じでした。軍尋問センターは悪名高い場所です。死んだも同然だ、と思いました。

■首にヒモ

「尋問は明日からだ」。受付で自分と家族の名前、住所を記録された後、そう告げられ、3人一緒に監房に入れられました。15平方メートルほどの房には、男女20人ほどが座っていて、大半は若者です。2時間ほどすると、私たち3人は大きな部屋に連行され、尋問はこの日から始まったのです。

部屋には20脚ほどの鉄製の椅子が並べられていましたが、尋問は私たちだけでした。背もたれが高い鉄製の椅子に座らせられ、目隠しと鉄の足枷、両手は頭より高い位置でナイロン紐で固定されました。

「心配するな。拷問はしない。テーザーサン医師がどこにいるのか教えろ」

尋問官は、3人同時に答えろ、と要求しました。答えの違いをみるためです。最後に会ったのはいつか。どこで発煙弾を作ったのか。同じ質問を何度も繰り返すのです。

何時間もたって、私たちは解放されました。房に戻る前に通った保安デスクの時計は午後9時を指していました。飲まず食わずで5時間も尋問されていたのです。

房の中では全員が体を横たえるスペースはありません。私たち3人は交代で横になり、どうにか眠りました。

尋問センターでは、朝には丸パン1個と水が、昼にはお粥、時にはお米とカレーのようなものが配られます。夜はまた丸パン1個と水だけ。トイレは、房の前にいる看守に合図し、手錠をされてから尋問室近くのトイレに連れて行かれます。

翌日の尋問は昼食後の午後1時に始まりました。この日の椅子は鉄製ではなく、肘掛けに両手を固定され、足枷をされた上に、天井から吊り下げたナイロン紐が首の周りにはかけられました。

「テーザーサン医師に最後に会ったのはいつか」

「発煙弾はどこで、どうやって作ったのか」

前日と同じ質問が繰り返されます。私とニッキは、うまく嘘をつきましたが、プーは怯えていて、口籠もっていました。回答に不満を感じる度に尋問官は、私たちの後ろに立つ3人の兵士に紐を引っ張らせて、首を締め上げました。

「お前の顔が気に入らない。どうでもいい、というような顔つきだ」

尋問官は、私の顔を何発か平手打ちさせましたが、ニッキは激しく殴られて歯が折れてしまいました。

「どうせ私は死ぬんだ」。そう思っていた私は、どんな質問にも本当のことを言いませんでした。

「お前たちの行為は(国軍や政府に対する妨害などの意図を禁じた)刑法第 505—A 条に相当する。お前たちは国家の敵だ」

発煙弾が、武器の不法所持やテロリズムに相当するというのです。

3日目に、プーだけが尋問に連れて行かれ、2、3時間後に房に戻ってきました。

性的な嫌がらせをされたか、と私は聞きました。「いいえ」と彼女は否定し、おずおずと言いました。「多分、私たちはテーザーサン医師がどこにいるのか、話すことを考えた方がいいんじゃないかしら」尋問官から私たちが説得するように脅されたに違いありません。「私たちはどうせ死ぬのよ」とだけ答えました。

1日8時間の尋問が1週間ほど続きました。午前から始まることも、午後から始まることもあり、数時間ごとに尋問チームが交代するのです。同じ質問が何度も繰り返されました。拘束から一週間が過ぎると、尋問官は外科用ナイフを脅しに使い始めました。両腕に薄く切り傷を付けるのです。それほどの痛みはありませんでしたが、翌日は、熱したギザギザのナイフで左前腕と足に切り傷を付けた後、「女の体に傷跡が残るのは困るだろう」と、アルコールをかけられたのです。燃えるように痛くて、涙がこぼれてしまいました。

■看守がメッセージを仲介

しかし、私たちは外の世界と断絶されている訳ではありませんでした。看守の中には、表立って歯向かわないけれども、軍事政権を快く思っていない人たちもいたのです。彼らは外部からのメッセージの伝達や、他の房にいる人たちとの間の連絡役をしてくれました。

「必ず解放させるから待っていて」という母。挙国一致政府(NUG)の外交担当、ササ医師の名で「頑張れ」と書かれたメッセージの紙は、房のみんなで回し読みしました。「今晚8時、みんなで革命歌を歌え」という伝令も来ました。革命歌「カバマチェブー(世界が終わるまで許さない)」(アメリカのロックバンド「カンザス」の「Dust in the wind」を基にした歌)は、1988年の民主化運動で歌われました。

この日は、尋問センターに革命歌が響きました。翌日、歌った者は全員が兵士に殴打されました。私たち3人は、窓がない懲罰房に監禁されました。2メートル四方にも満たないその部屋にはすでに1人が入れられていたので、4人で1週間を過ごしたのです。トイレは部屋の隅で済ませるしかなく、ネズミもいて、食事として投げ入れられるパンが床に落ちるともう食べられないほど、不潔でした。私たちはシャツを広げてパンをキャッチする方法を思いつき、食べ物を口にできるようになりました。

死にたい。生きていたい。心身共に弱っているプーを励ます私の中にも、両方の気持ちがありました。

■「お前たちにも起きること」

懲罰房から戻されるとまた、尋問の日々が始まりました。

「解放されるためには、二つの過程を経なければならない」と尋問官は言います。

「真実」を述べること。そして、(軍事政権トップの)ミアウンフライン総司令官のスピーチを聞いて、「抗議運動に2度と参加しません」という文書にサインすること。「それをしなければ、釈放はない」沈黙する私たちに尋問官は苛立っていました。数週間が過ぎたある日のことです。

尋問室に、30歳くらいの男性が連れて来られました。兵士が男性の両脇と頭を押さえ、手術着の男が3本の取っ手が付いた器具を持ち近づきました。私は咄嗟に、プーに「見ないで」と小さく言いました。

手術着の男は、器具を男性の片方の目に入れ2度ひねると、彼の前の器に目玉が落ちたのです。男性の絶叫が響きました。

「元に戻して欲しかったら、それを自分で拾え」

手術着の男が冷静に命じます。叫び続ける男性は両脇を抱えられ、部屋から出されました。プーは嘔吐していました。

「お前たちにも、あんなことが起きるんだ」

尋問官はそう言い、プーを医務室に連れて行くよう指示しました。

後から聞いたところでは、目をくり抜かれた男性は、少数民族武装勢力の支配地域に行ったものの軍事訓練に参加せず、町へ引き返す途中で国軍に捕まったとのことでした。

■「いつか必ず反撃する」

拘束から3カ月半が過ぎた6月16日のことです。広い部屋に、ずらり並んだ椅子の中央あたりに、プーを挟んで左手に私が、右手にニッキが座らされました。部屋には20人ほどの兵士がいました。「尋問チームが替わることになった。我々のようにはいかないからな」。尋問官が言い渡しました。

近くで、男たちの話し声が聞こえます。

「男を殺したら、女が話すんじゃないか」「女を1人やったら、他の奴が話すんじゃないか」

新たな尋問官という男性がナイフをちらつかせながら近づき、一人一人に聞くのです。

「お前たちのうち1人を殺したら、話すか？」

それからニッキを立てて兵士に何度も殴らせました。

「お前たちを喋らせるには、方法が一つしかないようだ」

尋問官は、兵士にプーを何度も殴らせ、5分ほどすると、部屋に私たちと同じ年頃の男性が入ってきました。オーボー刑務所で拘束されていたプーのボーイフレンドです。彼は椅子に座らせられ、頭の上で両手を交差して縛られました。

そして、彼の前で兵士がプーをレイプしたのです。6人が次々に彼女をレイプする様子を私たちは強制的に見せられました。30分以上も続いたように感じました。気を失い床に転がったままの彼女を残して、私たちは尋問室から出されました。



キャンドルを掲げクーデターに抗議する人々＝2021年3月12日、マンダレー（写真:ロイター/アフロ）

プーはどうなるのか。房に戻された私とニッキが、言葉少なに鉄格子の近くに座っていると、ボーイフレンドが歩いて行くのが見えました。兵士に両脇から抱えられ、うつむいたまま、なんとか歩いていました。彼が私の視界から消えた後、銃声が響き、大きな声が聞こえました。

私はその瞬間を目撃してはいませんが、彼は保安デスクの職員の銃を奪い、自らを撃ったそうです。

彼のお兄さんは、ゲリラ活動をしていました。国軍は母親に「息子は病気で死んだ。遺体を返して欲しいければ、兄が取りに来い」と言い渡したとのこと。マンダレーでは、この事件はすぐに市民の間に広まりました。

プーが私たちの房に戻ることはありませんでした。あれきり、彼女を見ておらず、生死も分かりません。家族にも安否は知らされていないのです。

6月18日、私は、オーポー刑務所内にある法廷で「2度と抗議活動に参加しない」という書類に署名をさせられた後、突然解放されました。母が4千ドル相当の賄賂を渡したからでした。母と兄が刑務所の外で待っていました。

「さあ、あなたが一番好きな料理をつくりましょう」

母の最初の言葉です。母は、魚と卵を使った料理をこしらえてくれました。

いつか必ず、解放区(少数民族武装勢力の支配地)に行つて軍事訓練を受けて反撃する。彼らに法的処罰を受けさせる。私が正気を保っていたのは、この思いと、看守が仲介してくれる支援のメッセージのお陰でした。もう2、3カ月、拘束が長引いていれば、私はどうなっていたか分かりません。

■戦いの道へ

解放後、1カ月間は静かに暮らしましたが、その後はじっとしてはいられませんでした。ニッキも釈放されたと聞きました。私は1人で(抵抗運動が活発な)北西部ザガイン管区などを3カ月ほどまわった後、東部に行き、民主カレン仏教徒軍(DKBA)のキャンプに身を寄せました。

「私は安全な場所にいる。若者たちを支援し続けて」。それだけを母に告げました。私がいなくなったことで、国軍は兄を2度も尋問した上に、母の精米工場に放火したのです。それでも母は、私を応援し続けてくれています。

私はDKBAで1カ月半にわたって軍事訓練を受けました。7、8キロの砂を詰めたザックを担ぎ、山や谷を走る苦しい訓練も、教官に励まされながらやり通しました。でもDKBAのキャンプは今年

1月14日、国軍から激しく攻撃されたのです。私は川を渡つて小高い場所に逃げ、そこから同僚7人が川を歩かされて後ろから射殺される場面を目撃しました。

■夢は生きて家に帰ること

胃炎に苦しんでいた私は1月27日、治療のためにタイ側の国境の町メソトに辿り着きました。「隠れ家」で休息していた時に、JKと知り合ったのです。彼はすでにカレン民族同盟(KNU)のコブラ縦隊の爆発物設置班に所属していました。

結婚式でモーサットエインは、カレンの民族衣装を着た(本人提供)

「一緒にコブラに入らないか」。彼の言葉はプロポーズと同じでした。KNUで2人で活動するためには、結



婚しなければなりません。「愛している」と彼が言った時、私も同じ気持ちでしたから、決断は難しくありませんでした。4月5日にコブラ縦隊に参加し、6月22日、彼の上官の中尉たちに証人になってもらって、ジャングルで結婚式を挙げました。白い糸で2人の右手を結ぶ、カレン民族伝統の式でした。

爆発物の設置は、時には敵の建物にも忍び込むのでとても危険な任務です。この1年半を乗り越え、私はどんなことでもできるのだと、自信が持てるようになりました。

時間がある時には、タイの携帯電話の電波が拾える小高い場所に登り、住む場所を転々としている母に連絡します。

生きて家に帰ること。それが今の私の夢なのです。

アウンサンスーチーさんが、武装闘争をどう思うかですか？市民と若者を信じ、その決断を信頼してくれているはずですよ。

(了)

【武器を取ったミャンマーの若者たち③】Z世代が乗り越えるジャングルでの試練 恐れと勇気と強固な意志と

10月2日(木)



約70人の部下を率いるコーラット。2児の父でかつては養殖業者だった(本人提供)

「Z世代は、我々よりもはるかに意志強固で勇敢だ」。1988年にミャンマーで起きた民主化要求運動に参加した50代男性らがそう語るのを何度か聞いた。「良い教育も受けており、彼らこそが将来のリーダーだ」という。

「Z世代」は、1990年代後半から2010年代前半ごろまでに生まれた若者たちだ。昨年2月のクーデター以降に起きた、民主化運動と武装闘争の中心の世代である。「デジタルネイティブ」といわれる彼らが、極限の状況を強いる環境で戦術を学び、十分な武器がないのに国軍に打撃を与えている。なぜ、そんなことが可能なのか。現地ですら若者たちから感じたのは「独裁政権を終わらせる」という信じがたいほど強固な意志だ。

6万人以上の若者たちがタイ国境近くに支配地域を持つ、ミャンマー最大規模の少数民族武装勢力、カレン民族同盟(KNU)に軍事訓練を受け、その大半が民主派、挙国一致政府(NUG)傘下の国民防衛隊(PDF)に入隊した。うち数万人がKNUとの編成部隊の一員として戦っているが、彼らの中には優秀な戦闘員や司令官に成長した者もいる。

20歳のスナイパー、ニック(ニックネーム)、中隊長として60人以上の部下を率いる27歳のコーラットがそうだ。1年半前まで、今の自分の姿を予想もしなかった2人だが、激しい戦闘の経験や仲間の死を語る時の口調は、静かで飾り気がない。そのことがかえって、過酷な日々を潜りながら成長していく彼らの揺るぎない覚悟を感じさせた。



行軍に向かうコーラット（本人提供）

■家族の反対を押し切って

ニックは、南部エヤワディ地域の出身。表情にどこかあどけなさが残る彼は、クーデター前は、化学や物理が得意でスマホゲームにはまっている学生だった。

2021年2月1日朝、Wi-Fiのシグナルが消えていた。何かあったのかと思っていたら、テレビニュースが「国軍のミンアウンフライン総司令官が全権を掌握した」と言った。一体、どういうことか。自分達の自由や権利が国軍の支配下に置かれたということなのだ、時間が過ぎるにつれて分かってきた。

ニックは2015年の総選挙で、アウンサンスーチー氏が率いる国民民主連盟(NLD)のキャンペーンを手伝った。選挙権はなかったが、軍事政権は2007年に抗議運動を

した僧侶を射殺したと知り、独裁政権は嫌だと思ったのだ。誕生したNLD政権の下で、社会がどんどん変わり、公共交通機関が目覚ましく発展するのを体験した。

だから、軍事政権に後戻りするなんて災難でしかないと思った。「自由も権利も、未来をも失い、進む道が閉ざされて迷子になった。僕たちの世代はそんな気持ちだったんです」

大都市で始まった民主化要求運動は瞬く間に地方にも波及し、ニックも何日もデモに参加した。

だが、友人が国軍に射殺され、「この方法じゃだめなんだ」と思った。国軍はデモなど気にもしていないのだ。YouTubeの情報と化学の知識とを合わせて友人たちと爆弾を作った。国軍の情報員をしている男の家の前に設置したが、国軍兵士がすぐに爆弾を発見してしまった。

KNUから軍事訓練を受けよう。仲間と話し合った。家族は反対したが、「自由と民主主義を取り戻す方法が他にないんだ」と押し切った。友人3人と共にKNUの第6旅団に辿り着いたのは、2021年6月6日だった。



ジャングルでPDFのために武器を製造する若者たち（現地からの入手写真）

ニックは子ども時代は病気がちで、体力に自信がある方ではなかった。覚悟はしていたが、軍事訓練は厳しかった。

午前4時に起床し、2時間のランニング。朝食の後、腕立て伏せなど体力を付けるトレーニングが続く。昼食の後は4時まで銃の扱い方などを学ぶ。夕食の後は当番で夜警をした。食事は「バナナぐらいしかないと思っていた」が、村人らがコメや麺を提供

してくれ、豪華ではないが十分だった。

仲間ができることは自分にもできるはずだ。何をするにも時間がかかったが、そう自分を鼓舞した。疲れ切った時は、故郷を思った。多数の人々が抗議運動を続け、武装闘争を選んだ自分たち

を応援していること。息子がいなくなったことで母が3回も国軍に拘束されそうになったこと。たくさんの方が自分の後ろにいて、支えてくれている。そう思うと、立ち上がることができた。

一番苦手だったのは、百メートルほどの距離を前転と後転で往復する訓練である。「近くで爆弾が爆発しても、すぐに立ち上がって逃げられる」ように、目眩に慣れる訓練だと教官は説明したが、目が回りどうにもならなかった。

それでも無理だと思っていたことができるようになり、全ての訓練が終わった時には、体力に自信が持てるようになっていた。

■できることなら撃ちたくない

ニックが初めての戦闘に出たのは12月。2カ月の基礎訓練の後、1カ月半のスナイパー訓練を終えて試験にも合格し、2週間の休みをもらった後だった。

「国軍が来る」と、スナイパーとして前線に行くよう命じられた時は、恐怖で体が震えた。スナイパーは仲間と離れ、1人で行動しなければならないのだ。だが、ジャングルの木陰でレミントン M700を構えると、恐怖心は消えた。最初の一発が、国軍兵士の首に命中した。

ニックは仲間のカバーに助けられながら、5回の戦闘で4人の兵士を倒した。

「奇妙なこともありました」。国軍の偵察兵らしい男を捕らえた時のことだ。国軍の戦闘服を着たその男の首には何箇所も注射針の跡があり、意識が朦朧としていた。何を聞いても、聞き取れない呟きを繰り返していた。基地に連れて行くと、間もなく国軍が空爆してきた。

「体内にGPSが埋め込まれていたのではないか」。あまりのタイミングに、仲間とそんな話をしたという。意識が朦朧としていたその兵士は、3日後に我に返った様子だったが、自分がどこにいるか分からずパニックに陥っていた。国軍は、兵士を使い捨てにしていると思った。

「できることなら人を撃ちたくないんです。でも撃たなかったら、仲間がやられてしまう」。武装闘争以外の方法で正義を実現できるのなら、それを選びたかった、と言う。「もし軍事政権が方針を変えるなら、国軍兵士を撃つ必要はないのです」。

今、それは夢でしかない。国軍は、KNU支配地域での空爆を激化させている。北部ザガイン地域では、国軍が学校を空爆し、国連児童基金(ユニセフ)によると子ども11人が死亡した。

「独裁政権を終わらせるまで家に帰りません」。帰宅する日は必ず来る。ニックは信じている。

■「私たちのビジネスも終わりね」

コーラットの黒目がちな目は柔らかい。待たせてしまったことを詫びると、立ち上がり、はにかんだように挨拶を返した。27歳。ミャンマーの最大都市、ヤンゴン郊外の村の出身で、魚やエビの養殖業を営んでいた。

彼は今、カレン民族同盟(KNU)と民主派「拳国一致政府」(NUG)傘下の国民防衛隊(PDF)で編成する「コブラ大隊」の准将で、70人近いPDFの部下を率いる中隊長なのだ。

元々、政治にも武力にも無縁だった。生まれ育ったヤンゴン管区の村には電気も電話もなく、道路が整備されていないために、村外の世界と繋がりもなかった。

2010年に当時の軍事政権が「民政移管」を発表した時、コーラットは高校生。電気や電話、インターネットが来て、暮らしが変わり始めた。国民民主連盟(NLD)政権の時代にもたらされた暮らしの変化は、人をも変えた。道路が舗装されて外部との行き来が容易になって村人の視野が広がり、

起業する人も出てきた。村内に高校もできた。コーラットは NLD が勝利した年に結婚し、息子 2 人が生まれた。養殖業も順調に拡大し、平凡だが幸せな日々だった。

「私たちのビジネスも終わりね」。2021 年 2 月 1 日、国軍が全権を掌握したと発表した時、妻はそうつぶやいた。繁栄に向けて社会が歩いていたはずなのに、なぜクーデターなのか。

インターネットと電話は間もなく復活したが、拘束された指導者たちは解放されなかった。抗議デモが、ヤンゴンで始まっていた。

「行きましょう」。子どもたちの未来のためにも、コーラットと妻は何かしなければならなかった。村人たちを集めヤンゴンに向かい、デモに参加した。

2021 年 2 月 22 日、全国で数百万人がデモに参加した風景は、市民に勝利を確信させた。「市民が支持しない者たちが、国を治められるはずがない。村でも嫌われ者は村長になれない。あの時はそう思った」とコーラットは言う。

■誰にも言わずに村を出る

権力を脅かす者は誰であろうと、国軍には許されざる存在だった。武力弾圧が間もなく始まった。

「発砲音は今じゃ、日常になってしまいましたけれどね」。コーラットは、銃声の中を必死で走った当時のことを話しながら、笑う。

政治に詳しい友人が「武力闘争しかない」と言った時は、迷った。人を殺す道具に触れたこともないし、家族に兵士になった者はいない。だが、犠牲者は増えていく。気持ちが固まった。

2021 年 4 月 17 日朝、誰にも言わずに村を出て夕方、タイ国境近くのカイン州パアンに着いた。妻に電話し「軍事訓練を受ける」と告げた。妻は彼の気持ちを理解していて、反対しなかった。安全を確かめながらいくつかの町を迂回し、KNU の第 7 旅団に着いたのは 6 日後だった。

■恐怖で震えた

独裁政権を排除するためには、できることを全てやる。コーラットの決意は固かったから、厳しい軍事訓練も辛くはなかった。第 7 旅団で 1 カ月半の基礎訓練を受けた後、第 6 旅団で特殊部隊の訓練を受けた。

12 月 15 日、日本政府が職業訓練センターを設置した町、レイケイコーを国軍が襲撃した。離脱した国軍兵士や民主派活動家らが多数滞在していることが知られていて、彼らの拘束が国軍の狙いだったとみられている。インターネットメディア「イラワジ」によると、国軍は元国会議員 2 人を含む 40 人をこの時に拘束した。

襲撃に対し、カレン民族同盟 (KNU) と国民防衛隊 (PDF) の編成部隊が反撃した。2 日に渡ったこの戦いが、コーラットの初めての戦場となった。

コーラットは PDF の小部隊長を任され、4 人の部下と待ち伏せ攻撃の位置に着いた。響き渡る砲弾や銃声。恐怖で体が震えた。

国軍兵士の隊列が、拘束した 3 人の活動家を「人間の盾」にして、コーラットの部隊が潜む場所に近づいてきた。3 人は、兵士に挟まれて列の前方を歩かされている。コーラットの部隊からわずか 3 メートルの距離だ。

列の後方には兵士しかいない。最後尾が近づいた時に、攻撃命令が出た。構えていたカラシニコフの引き金を5人は一斉に引いたが、3人の銃は数発撃っただけで動かなくなった。PDFには十分に機能する銃が不足しているのだ。

コーラットが敵に浴びせた銃弾は、国軍士官に命中した。死亡した士官を放置して国軍兵士が退却している間に、塹壕で持っていた銃に装填して部下に渡し、自分は国軍兵士が放棄した銃を取りに行った。81ミリと100ミリの迫撃砲が次々と周囲に着弾する。「死ななかったのは、応援が到着したから」。午後7時ごろから始まったこの交戦は30分で止んだ。

翌朝、戦闘が再開した。国軍側は20人ほどの死者が出たところで、空軍機が飛来し、空爆が始まった。土地を熟知しているKNUとPDFは、橋の下や岩の間など避難場所に走り込んだが、負傷した国軍兵士は放置され、爆撃で死亡したという。

■「弾丸がありません」

夜のジャングルで国軍に出くわしたこともある。部隊を連れて防衛線にいたところ、向こうから平服の男たちがやってくるのが見えた。防衛線を越えて侵入して来る。

「誰だ？」近づいて声を掛けると、男が質問した。

「君たちはどこの大隊に所属しているのか？」

まずい。国軍兵士だ。こんな質問をする者はKNU地域の住民にもいない。目を凝らすと、60人ほどの男たちが後ろに控えているのが見えた。「走れ！」

部下に退却するよう合図を送った途端、国軍の銃撃が始まった。暗闇を走るコーラットは左ももに被弾し倒れ込んだ。地面を這って塹壕に滑り込み、流血する傷に包帯を巻いた。弾は貫通していたが、痛みはあまり感じなかった。「部下を守らなければ、という思いの方が強かったから」

国軍兵士たちを挟む形で部下を二手に分けて一晩を明かし、朝に攻撃を再開した。コーラットは4人の狙撃手を有効に使い、国軍に打撃を与えたという。

コーラットは他の戦闘でも複数の司令官らを倒した。的確な状況判断と、部下を守り抜く意志。元々、彼に備わっていた能力なのだろうか。戦闘の度に上司や部下の信頼を集め、コーラットは2022年4月、国民防衛隊(PDF)の中隊長に昇進し、70人近い部下を率いることになった。

Z世代が中心のPDFは、士気が非常に高い。だが、武器が十分でない。戦闘の最中に部下が「弾丸がありません」と訴えてくることもある。

「最もやるせない時です」とコーラットは言う。銃を何人かで共有し、自分たちで製造もする。国軍から奪うことも、市民からの寄付金で買ったりすることもあるが、それでも足りない。コーラットの家は、3丁の銃を寄付した。タイの闇市で購入する武器は値段が通常の3倍に跳ね上がり、M4ライフルは15万バーツ(約58万円)だという。



前線でのコーラット（本人の提供写真）

■記録しておかなければ

ジャングルで恐ろしいものの一つは、マラリアである。コーラットも3回、感染した。治療薬は前線では常に足りず、時には薬が到着するのに2週間かかることもある。マラリアで死亡したPDF 隊員もいる。死はどんな形で訪れるか分からないのだ。そのことを若者たちはジャングルで実感する。

だからだろうか、「記録しておかなければいけませんから」と、誰もが戦闘や訓練中の写真や動画をスマホに保存している。

コーラットも多数の写真を見せてくれた。連続した銃撃音が響く戦闘中の動画。頭部を撃たれ死亡した20歳の部下の写真。全てが人生の特別な人々であり瞬間なのだ。

迷彩服姿のコーラットの写真もある。AK 自動小銃を片手で抱え、数えきれないシェルホルダーを迷彩服から下げた精悍な横顔。グレネードランチャーと400発の弾丸を前に準備をする写真。この装備で、彼は行軍し、走り回って指示を出し、部下を守るのだ。終始、静かなトーンで話す目の前の彼とは、まるで別人である。クーデター前に、この姿を想像した者はいないだろう。

自分でも驚かないか。そんな問いに、コーラットは「いいえ」と答える。「独裁政権を倒すまで戦うと決意したのですから」

■後に続く者がいるから

「彼はとても不運でした。」

コーラットが引き裂かれた足の写真を示す。24歳の部下は、国軍の砲弾の破片が足に命中し、続けて別の砲弾の破片が再び足を直撃したのだ。コーラットは這って彼の元に辿り着いたが、また別の砲弾が近くに着弾した。

「着弾時のものすごい振動は、心臓に悪影響を及ぼすんです」。地面に横たわっていた部下の心臓には、振動が決定打だったようだ。コーラットは部下を背負い、安全な地まで運んだが命は救えなかった。

部下が苦しんでいないかどうかを、コーラットはいつも気に掛けている。戦闘が終わり、部下たちが全員無事なのを確認して、ひと息つく。今はそれが最も幸せを感じる時間なのだ。

だが「死んだ部下を哀れだとは思いません」とも言う。コーラットの口調に力みはない。「彼らが安らかに眠れるよう、僕たちが戦い続けて独裁政権を倒すしかないのです。僕も戦闘で死ぬかもしれない。でも後に続く者が戦い続ける。そう信じています」

コーラットの幼い息子2人と妻も3月、密かにKNU 支配地域に来た。彼が複数の司令官らを射殺し、ソーシャルメディアでも知られるようになったことで、国軍が妻や息子を監視し始めたからだ。妻も軍事訓練を受け、物資調達など後方支援をしている。

「10年後、僕は幸せに家族と暮らし、自分の家を持ち、順調にビジネスをやっているはずです」
将来について尋ねると、彼は相変わらず静かなトーンで答えた。
「この革命を達成し、その後の復興の日々を生き残っていれば、ですが」。彼はその頃、37歳の
はずだ。